

#その発信が世界を変える

#東京をつなげよう

2020東京JC連携室

『心の手を繋ぎませんか』



公益社団法人 東京青年会議所
国際政策室 担当:●●●● TEL: 0000000000

2018年中央区委員会新規事業

『心の手を繋ぎませんか』



本年度、中央区委員会では2020年東京オリンピックパラリンピックに向けて、心のバリアフリーの1つとして障害を理解する事業を開催しました。

『心の手を繋ぎませんか』と題して、様々な障害を理解いただく為にいくつかの企画を盛り込みました。そもそもどこまで障害を理解しているのか、障害とは何なのか？誰しもがなり得る可能性を持つ障害だが、それを事前に理解しておくことの大切さと、障害がある方に対してどのように接していけばよいのかなどを覚えていただく為に考えてまいりました。

中央区居住者の2.6%が何らかの障害が有りながら住んでいるが、触れ合う機会が非常に少ない現状にある。そんな中央区に選手村が出来、まともに対応することは出来ないし、大会終了後の街でも障がいのある方と触れ合う機会が必要であり、それが共生社会の実現への1つでもある。だからこそ、触れ合う機会とそこからの自らが積極的に行動する人々が必要となります。その目的のもと、事業には障害がある方も参加出来るように考えて設えました。

企画の1つとして、手話を取り入れている珍しい演劇で杉並演劇賞を受賞している『HandY』というプロの演劇を鑑賞していただき、障害のある人ない人の友情や接し方などを理解していただきました。

そして、中央区にある障害団体を知っていただき、少しでも身近に感じていただくのと共に障がいに対する理解を深めていただきました。

更には、障がい体験会を実施しました。手話を習ったり、車いす体験をしたり、点字体験をしていただきました。各体験には、実際に障害がある人について貰い、彼らと話をさせていただくことでより一層に障害を理解し、触れ合う機会を得て貰いました。

多くの方の参加をいただき、我々の活動にご理解を賜っていただき、これからも共に活動していただく意思を持った方々とも繋がる事が出来ました。

それぞれが互い歩み寄り、少しでも理解し合い、心の手を繋ぎあうことが出来れば、より良い共生社会を作り、明るい豊かな社会が実現を目指して参ります。

江戸川区委員会

認知症から学ぶ人のつながりプロジェクト

認知症のある方が2025年には約700万人まで増加し、5人に1人が認知症になると予測されている。江戸川区でも小岩・小松川・葛西の警察署の統計データによると1日に6人の頻度で徘徊に関する110番通報が起きており、この問題は交通事故や生活時トラブルなど多岐にわたっている。厚生労働省が推進している区民が認知症に対する正しい知識と理解を持ち、地域で認知症の人やその家族に対してできる範囲で手助けする「認知症サポーター」の養成において、江戸川区のサポーター数の人口に占める割合は、東京23区内で最下位である。本事業を通じ認知症への理解と協力を区民へ働き掛ける活動を行う。さらにこの事業に関わる医療機関、介護施設(事業者)、行政、警察、町会、商店街、企業などと2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて強い関係性作りを図る。



江東区委員会

みんなで和っしょい江東区!

公益社団法人東京青年会議所江東区委員会は、当年度の事業であります「みんなで和っしょい江東区!」を平成30年7月15日(日)に亀戸文化センターカメラホールにて開催させて頂きました。江東区は2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックの多数の会場となり、沢山の訪日外国人を迎える事となります。その中で訪日外国人の皆様にとりおもしろいおもてなしを行うために、日本や地域の歴史や文化をあらためて学び、日本や地域に誇りをもって2020年を迎える必要があると考えました。事業名称である和っしょいの語源は、和を背負うという意味より、一致団結を表す言葉となります。江東区が一致団結し、素晴らしい2020年を迎えたいとの思いを胸に、当事業を開催させて頂きました。



文京区委員会

こころのバリアフリー推進プロジェクト2018

'2020年オリンピック・パラリンピック東京大会のため公共交通等ハードな部分でのバリアフリー化は進んでおりますが、東京都が行った意識調査によると障がいのある方が必要とする支援は「適切な指導者」16.8%「一緒に行動する仲間」19.5%と人的支援が多く、ソフト面での支援が足りておりません。本事業は2017年より文京区周辺の在住・在学・在勤者を対象とし、障がいのある方のリアルな日常や、障がいのある方の実生活の一部を垣間見る事により、両者間の隔たりを縮めるよう行っておりまして、しかしながら、検証によると障がいのない方が実生活においてどのように自発的な取り組みを実行するか課題として残りました。日常生活の中で実践できる具体的な行動について議論を深化させることが急務であると考えております。また、2020年に向けてパラスポーツ選手も含め多くの障がいのある外国人の訪日も予想されているにも関わらず、異民族との交流、理解不足により障がいのある方とない方双方に異民族に対するバリアが存在しております。2020年に向けて世界各国からの障がいのある外国人の受け入れを円滑に行っていくためにも、障がいのある方とない方へ交流の機会を提供を行うことにより、相互理解を促し、各人の異民族に対する意識変容を促進することによって、異民族に対する寛容性の拡大を図り、バリアを取り払ってまいります。

